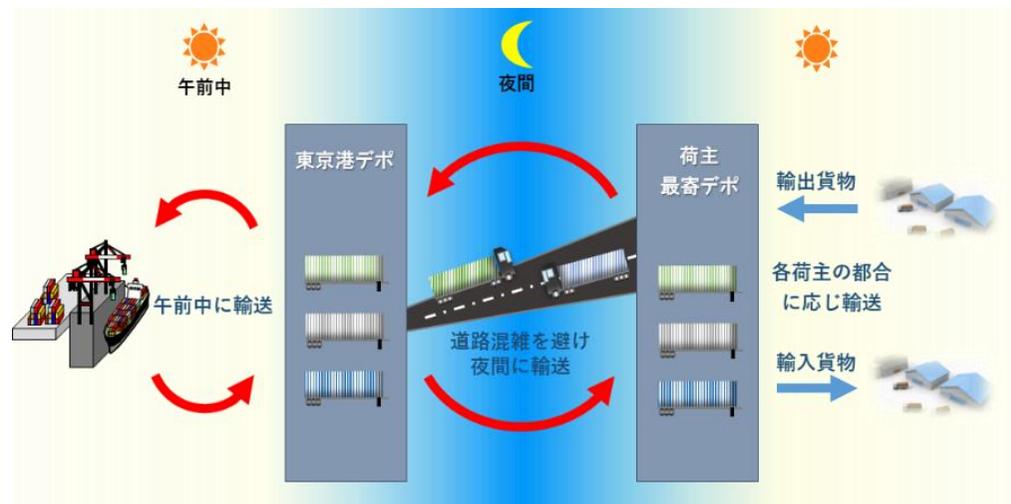


令和7年度東京港オフピーク搬出入モデル事業 | 実施概要

- ターミナルが比較的空いている時間帯にコンテナ搬出入を行う「オフピーク搬出入」を推進するため、令和6年度に**事業モデルを構築**
- 令和7年度は、オフピーク搬出入の普及に向けて、期間や輸送本数など**規模を拡大してモデル事業を実施**

実施概要

- 実施期間 2025年11月4日(火)～12月12日(金)
- 実施本数 427本 (内、午前搬出入415本)
- 実施事業者 15社1グループ
 - ✓ 荷主企業
株式会社クボタ (代表)、本田技研工業株式会社
コマツ、三桜工業株式会社、白石カルシウム株式会社
株式会社鶴見製作所
パナソニックオペレーショナルエクセレンス株式会社
サントリーロジスティクス株式会社
パラマウントベッド株式会社、キヤノン株式会社
 - ✓ 物流事業者
吉田運送株式会社、みなと運送株式会社
鈴与株式会社、株式会社日新
青伸産業運輸株式会社



オフピーク搬出入と連携した物流効率化の取組

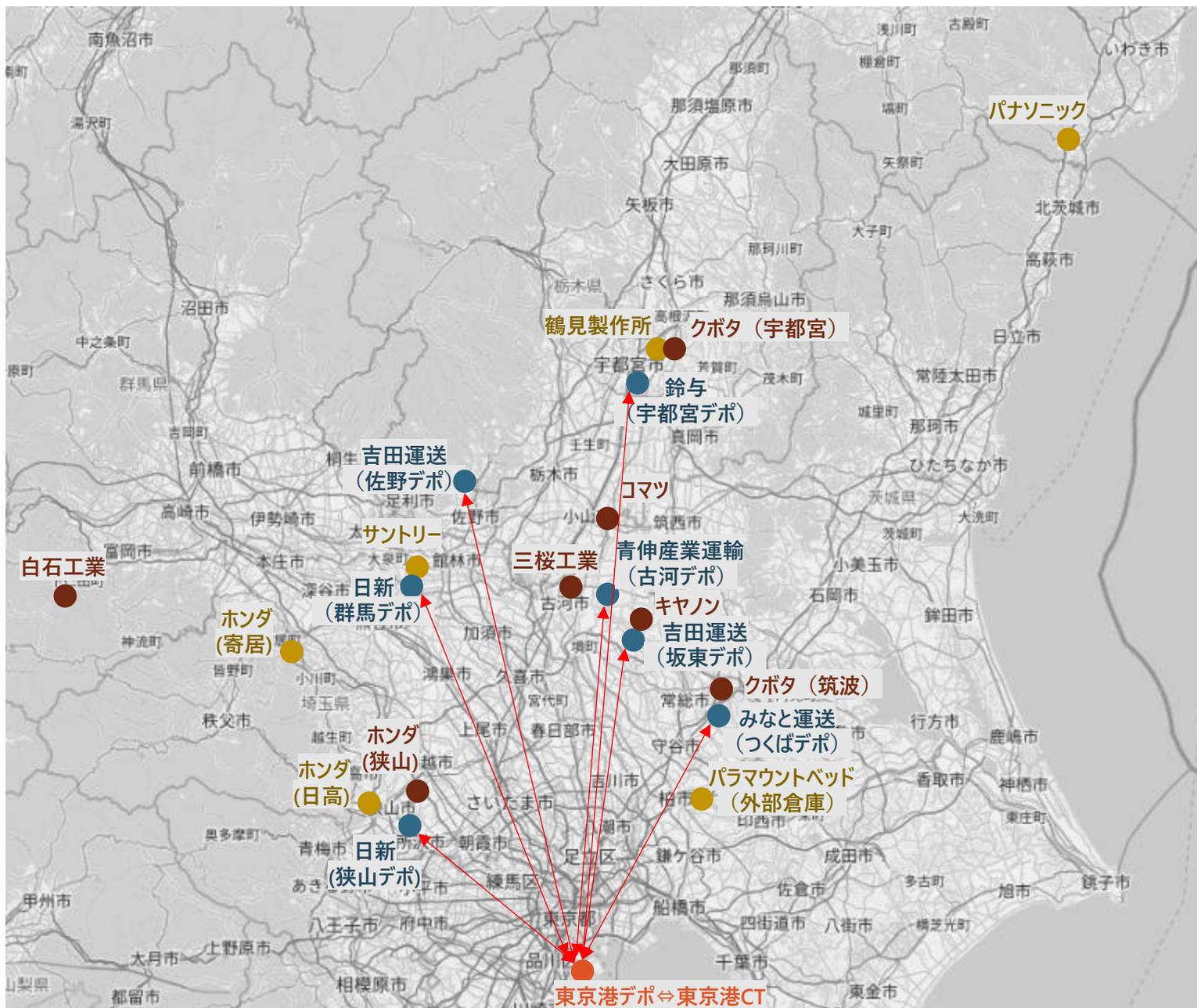
オフピーク搬出入に加え、各荷主企業等が新たな物流効率化の取組を実施

■新たな物流効率化の取組事例

- ✓ 夜間輸送の体制構築による車両効率の向上
- ✓ 中継輸送によるCRUの実施とドライバーの負担軽減
- ✓ 物流拠点の変更によるサプライチェーン効率化の試行

令和7年度東京港オフピーク搬出入モデル事業 | 実施概要

令和7年度「東京港オフピーク搬出入モデル事業」 | 参加者企業の拠点一覧図



- 輸出荷主
- 輸入荷主
- 荷主デポ
- 東京港デポ

令和7年度東京港オフピーク搬出入モデル事業 | 実施結果

- 荷主企業においては、オフピーク搬出入への理解が進むとともに、自ら物流効率化に取り組む機運が向上した
- 物流事業者からは、本事業を継続的に実施できるスキームが求められた

荷主企業による検証結果

取組内容

- オフピーク搬出入のリードタイム延長に対応するため、
 - ✓ 調達や生産部門等と日時等を調整
- CRUを実施するため、
 - ✓ コンテナ利用先に合わせたコンテナ内部の清掃徹底や品質レベルの確保
 - ✓ 海外現地法人、フォワーダーと利用船社等を調整 など

効果

- ✓ オフピーク搬出入の重要性や物流改革に対する、社内の理解促進や機運向上
- ✓ ICDの活用による空コンテナ輸送距離の削減 = 荷主としての輸送安全責任範囲の縮小
- ✓ 待機時間削減によるScope3の排出量及び輸送費上昇の抑制 など

課題

- ✓ リードタイム延長やCRUを実施するための、営業、生産部門等との調整や安定的な貨物量の確保
- ✓ 輸送やデポ利用に係るコストへの対応 など

今後に向けて

- ✓ 官民連携、他の荷主との連携拡大による効果や意義を認識
- ✓ 東京港のみならず他港への水平展開も検討したい
- ✓ CRU+東京港デポ活用の取組を拡大するしくみづくりが必要 など

物流事業者による検証結果

輸送実績

単位：本

輸出	午前	午後	輸入	午前	午後
大井	165	11	大井	160	1
品川	3	0	品川	1	0
青海	12	0	青海	67	0
中防外	2	0	中防外	5	0

効果

- ✓ ヤード混雑回避により、計画通りの運行がしやすくなった
- ✓ 長時間待機がないことで、ドライバーの拘束時間が削減するとともに精神的負担も軽減
- ✓ 輸送生産性が向上し、東京港デポで搬出入ができることで、日中帯でも輸送効率化・待機時間削減ができた など

課題

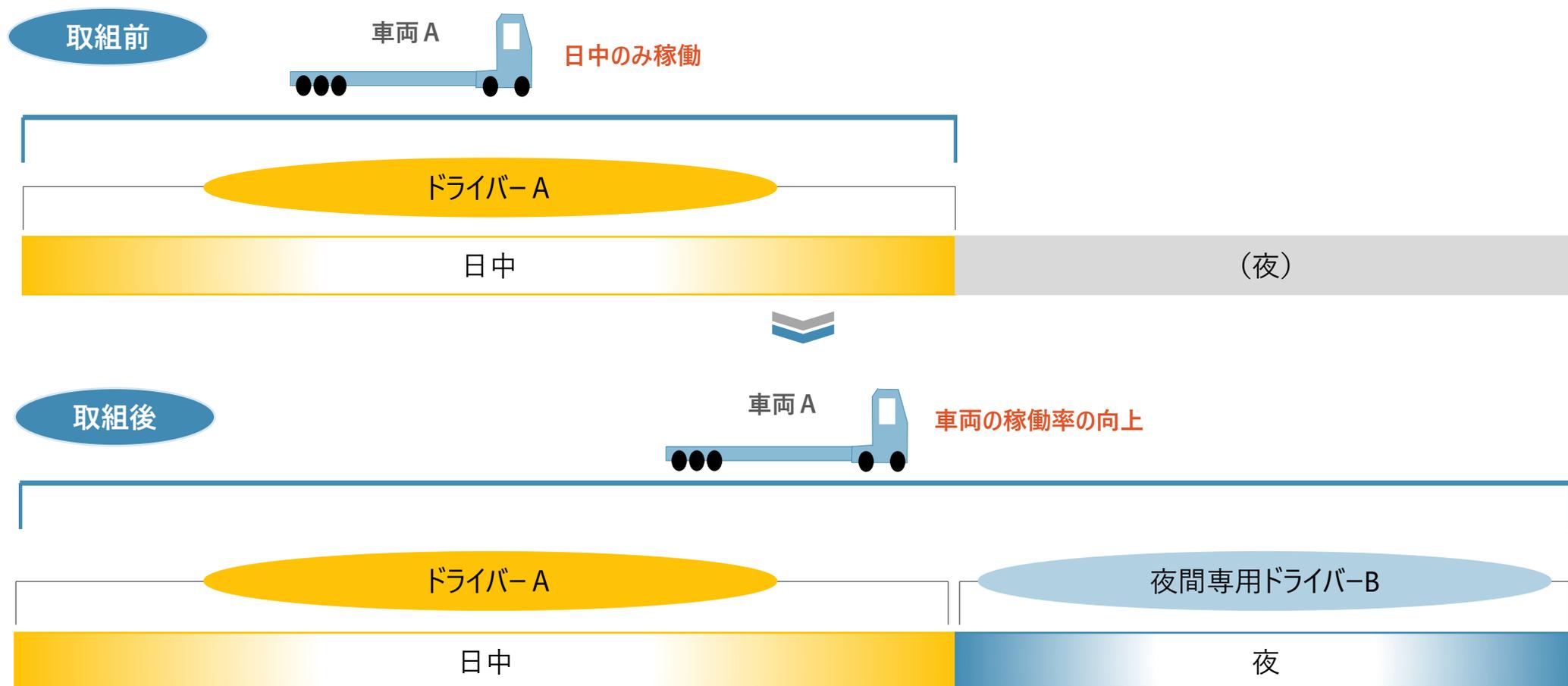
- ✓ オフピーク搬出入と夜間輸送に対応した配車調整が煩雑
- ✓ 夜間・早朝稼働に伴うや人件費や東京港デポの利用料
- ✓ 港側に車庫がない事業者は東京港デポが継続的に必要
- ✓ ターミナルへの搬出入（ショートドレー）に特化した車両の手配とコストの荷主転嫁 など

次年度からは、引き続きこの輸送モデルやオフピーク搬出入の拡大を図るため、物流効率化に取り組む荷主企業等と連携を図り、ターミナルと東京港デポ間の輸送を集中的に行う「オフピークシャトル輸送事業」に取り組む

事例1) 夜間輸送の体制構築による車両効率の向上 (陸運事業者)

- モデル事業をきっかけに、夜間専門のドライバーを採用したことにより、日中と夜間で車両の稼働率が向上
- 加えて、ターミナルや道路が空いている時間帯に輸送することで、車両1台あたりの回転数が向上するなど輸送効率が向上

車両の稼働率の比較

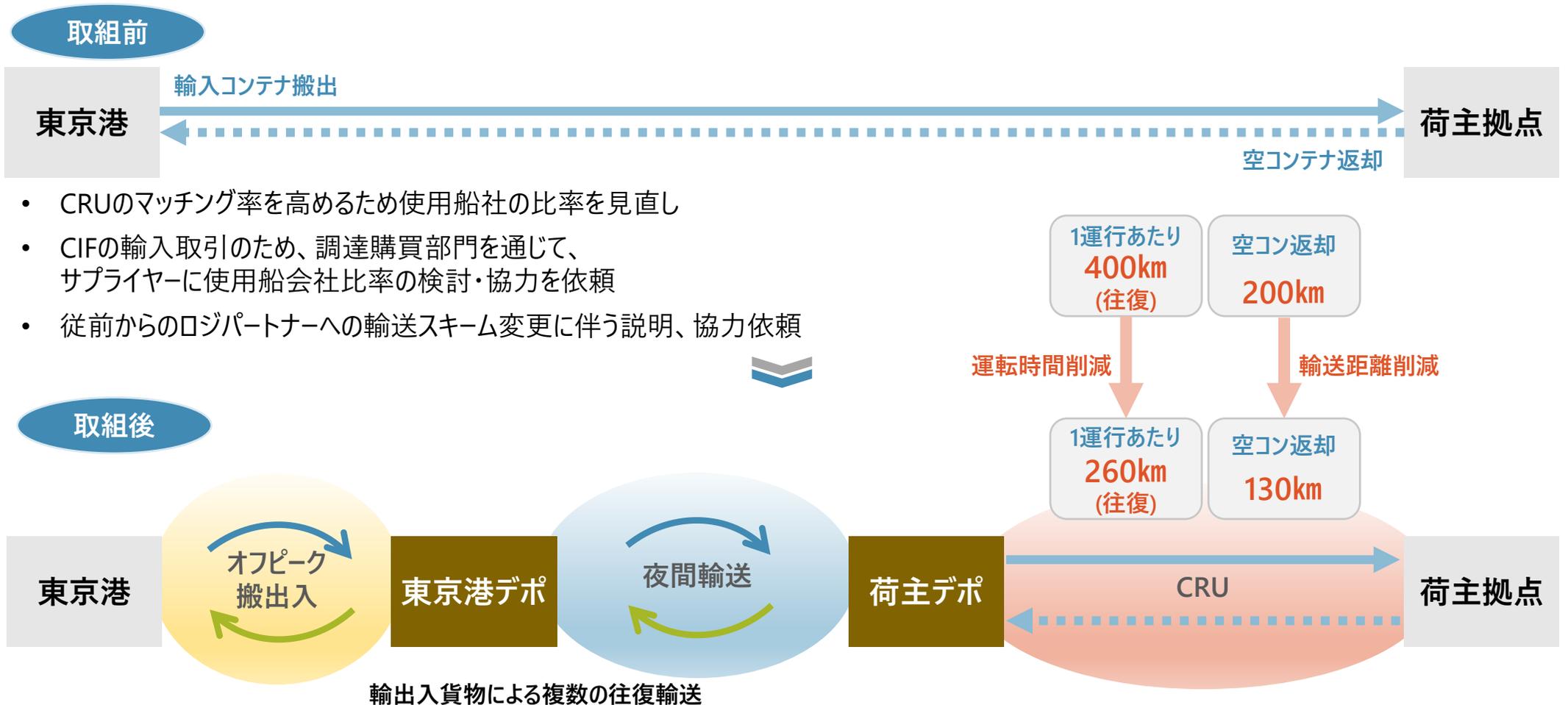


事例2) 中継輸送によるCRUの実施とドライバーの負担軽減 (荷主企業)

いわき市の荷主拠点と東京港間の長距離輸送において、荷主デポを中継輸送やCRUの拠点として活用

- 1運行あたりのドライバーの運転時間を短縮
- 他の参画荷主企業と連携してCRUを実施し、空コンテナの返却距離を削減

取組前後の輸送ルートの変化



事例3) 物流拠点の変更によるサプライチェーン効率化の試行 (荷主企業)

輸入コンテナの搬入拠点を客先に近い外部委託倉庫に変更

- インランドデポの活用が可能になり、CRUにより空コンテナの返却距離を削減
- 倉庫間の製品移送の削減のほか、従前倉庫の配送作業削減や容量に余裕が生まれるなどの効果も期待

取組前後の輸送ルートの変化

